

[報告] 北丹後地震の記念碑・震災記念館と復興建築

(第 32 回歴史地震研究会公開講演会要旨)

京丹後市教育委員会文化財保護課* 新谷 勝行

§ 1. はじめに

北丹後地震(丹後震災)は 1927 年 3 月 7 日午後 6 時 27 分 41 秒に、京丹後市網野町郷付近を震源として発生した直下型地震である。丹後半島を南北に走る郷村断層と東西に走る山田断層が動き、丹後全体で約 3,000 人が亡くなった。震災発生から 88 年が経過し、体験世代はごくわずかとなり、震災の記憶継承が課題となっている。

本報告では、丹後震災の記念塔、供養塔と慰霊行事の現状を見るときともに、丹後震災記念館をはじめとする震災復興建築について紹介し、震災の記憶継承の課題を見るものとした。

§ 2. 丹後震災の記念塔、供養塔

丹後震災 1 周年に際し、大海原重義京都府知事は「義捐金は、二回に亘る分配の残額がまだ数万円あるので、これが有意義なる処分方法に就ては、目下折角考究中であるが、大体の計画としては、此残額を以て、罹災地の町村毎に記念碑を建て、更に震災の中心地峰山町には震災記念館の如き性質の会館を建設し、郷村の断層の写真を初め震災記録、史料等を保存せしめ、罹災地の子々孫々をして昭和二年三月七日を追憶せしむる事をしたいと考へてゐるのである」という談話を発表している。後述する震災記念館の建築とともに、町村ごとに記念碑を建てる構想が示された。しかし現存する記念碑・供養塔約 30 基の分布を見ると、被害の大きい町村に分布することはわかるが、すべての町村に建立されたわけではない。

被害状況などが記載され、後世へその記憶を引き継ぐべく建立された記念碑や、震災死亡者の供養塔では、3 月 7 日の慰霊行事が多く見られた。しかし戦前は行われたものの、現在も継続する事例は少なく、梅林寺(与謝野町三河内)境内の震災供養塔と、常德寺(京丹後市大宮町口大野)境内の供養塔などにとどまる。慰霊行事による震災の記憶継承は、戦時下で途絶し、戦後、復活しなかったものが多いようである。

§ 3. 丹後震災記念館の建築とその後の経過

3.1 財団法人丹後震災記念館文書

丹後震災発生から 2 年後の 1929 年(昭和 4 年)12 月に竣工した丹後震災記念館(京丹後市峰山町室)は、文字通り丹後震災を記念して建築された建物である。その建築までの経過やその後の展開は、文書の内容から判明する。

文書簿冊は 6 冊ある。後半の 4 冊は、財団法人丹後震災記念館(以下、「財団法人」とする)が、前半の 2 冊は京都府社寺課が作成者である。詳細に見ると、財団法人丹後震災記念館は、当初は京都府社会課が、後に社寺課が、戦後は文化財保護課が所管し、「京都府」の柱書がある野紙が使われていた。そのため本文書群は、京都府庁で作成され、財団法人解散に伴い峰山町へ引き継がれたことがわかる。

3.2 京都府主催慰霊祭の実施と丹後震災記念館

上記文書は、1928 年(昭和 3 年)3 月 7 日の震災一周年慰霊祭の実施起案から始まる。府主催慰霊祭は発議時期が遅く、町村主催慰霊祭の執行が決まった後に決定したと推定される。府主催の慰霊祭は、午前峰山小学校講堂を会場に神式・仏式で執行され、午後には峰山町・網野町・三河内村・久美浜町で府主催の講演会が開催された。

翌 1929 年の二周年慰霊祭終了後、京都府学務部長は、関係町村長との協議の場で、震災義捐金の残金の使用方法について、震災記念館の建築と財団法人の設立が提案し、了承を受けている。これを受け京都府は、技手の一井九平設計により丹後震災記念館建築の起工を行い、同年 5 月 24 日に山虎組と契約し、12 月 18 日には竣工した。

建築と平行し、義捐金残金を用いた財団法人設立が発議され、翌 1930 年 1 月 7 日には文部大臣より設立認可を受けた。このようにして同年 3 月 7 日の震災三周年慰霊祭は、財団法人が主催し、丹後震災記念館を会場に執行された。

財団法人の理事は、京都府学務部長・社会課長・社

* 〒629-2501 京都府京丹後市大宮町口大野 226
電子メール: k.hashimoto-74 @ city.kyotango.lg.jp

寺課長のほか、震災地町村長（峰山町・久美浜町・浅茂川村・岩滝町長）で構成される。職員は京都府社寺課・社会課と峰山町の職員が委嘱されている。しかし残された文書の大半は京都府社寺課の職員が作成しており、「京都府」柱書の罫紙が使われている。そのため、財団法人の事務は、丹後震災記念館ではなく府庁で行われたことがわかる。

財団法人の設立は、理事構成などから、府と町村が個別執行していた慰霊祭の統一と見ることができる。丹後震災記念館は、その拠点施設として位置づけられたといえよう。一方、財団法人の慰霊祭を「京都府の慰霊祭」と記載する史料はその後も見られ、戦前の各町村では個別に慰霊祭を執行していた。

3.3 財団法人丹後震災記念館の活動

財団法人の設立申請書には、慰霊祭の執行のほか、震災記念物の保存、地震に関する調査研究、社会教化施設という事業目的を記す。このうち地震に関する調査研究は、実施状況が不明であるが、社会教化事業は講演会の実施があった。財団法人の事業でもっとも大きな割合を占めたのは、慰霊祭の執行と震災記念物の保存であった。

まず慰霊祭は、1930年から37年までは毎年行われていた。しかし1937年の理事会で5年ごとの開催が決まり、その後は、戦時下の1943年と戦後の1948年に行われた。

次に震災記念物の保存について見てみたい。1930年（昭和5年）には、前年に天然記念物指定された郷村断層の土地購入と保存施設の建設、標柱設置が行われている。現在も覆屋で保護されている生野内、樋口地区の断層は、この年に前身施設が建築された。

1933年（昭和8年）には、震災死亡者名簿の作成と写真収集が発議され、震災地各町村に名簿と写真提供依頼が行われた。現在も残る「昭和二年奥丹後震災遭難者名簿」は、「財団法人丹後震災記念館」の柱書がある罫紙に毛筆で記されている。写真は、各町村予算での複写依頼を行っていたこともあり、すべてを収集するには至らず、途中で終わったようである。現在残る「死者のおもかげ」アルバム（1971年にアルバム貼り付け）の写真は、この収集事業によるものと推定される。

1935年（昭和10年）8月には、熊野若王子神社（京都市左京区）宮司で洋画家の伊藤快彦へ震災実況模写油絵の作成を、また翌1936年には、京都美術工芸学校の生徒に油絵・水彩画の作成を依頼している。伊藤が描いた油絵は、丹後震災記念館に3枚現存する。また京都美術工芸学校の生徒による絵は、油彩画10面と額装された水彩画8面が残る。なお伊藤が残した写真アルバム（熊野若王子神社所蔵）には、1937年（昭和12年）慰霊祭の風景と推定される写真がある。写真には、神式による慰霊祭の様子とともに、震災記

念館講堂に伊藤の油絵と京都美術工芸学校生徒の作品が掲示されたようすが写されている。

3.4 財団法人丹後震災記念館の解散

丹後震災記念館のように震災を記念した建造物は、濃尾地震の震災記念堂（岐阜市）や、関東大震災の震災記念堂・復興記念館（東京都墨田区）が現存し、このほか震災記念館（神奈川県横浜市）、震災記念閣（神奈川県横須賀市）がかつて存在した。

丹後震災記念館は、濃尾地震の震災記念堂のような慰霊祭実施の空間と、関東大震災の震災記念堂のような絵画掲示の空間を共有する施設として利用された。しかし復興記念館や横浜の震災記念館、横須賀の震災記念閣のように、罹災遺物の収集はあまり行われなかったものと推定される。これは、財団法人の書類中に、震災遺物寄贈に関する文書が1件しか確認できない点と、1940（昭和15）年春に来館した東舞鶴市（現在の舞鶴市）の山本文頭が「震災記念館とあるからは、震災記念資料博物館といふ期待を抱いて訪ねたのであるが記念資料の展観が申訳に過ぎぬ実態はどうしたことか、当時を瞑想し罹災精霊におのづと黙祷をさぐぐにいたる資料記念館であるを望みたい。」と記すことから推測される（山本 1940）。一方で震災記念館に資料展示があったという証言もあり、詳細は今後の検討課題である。

その後、1954年には財団法人は解散し、建物・備品は峰山町へ、郷村断層土地は網野町へ譲渡された。その後、丹後震災記念館は、峰山町中央公民館と峰山町立図書館として利用された。

3.5 丹後震災記念展の開催

1972年（昭和47年）3月の震災45周年を機に、丹後震災記念館にあった峰山町立図書館により収集された資料を中心に丹後震災記念展が始まった。図書館が現在地に移動した1981年以降は、会場を峰山町中央公民館へ移し開催され、現在に至っている。その後、寄贈を受けた資料もあり、収集資料はわずかではあるが増加している。

丹後震災記念展は、震災に関する研究成果や資料の展示とともに、震災に関する遺品や死亡者名簿の公開という慰霊的な側面も持ち合わせていた。しかし現場で見ている限り、震災死亡者名簿を見る方は年々少なくなっている印象を受ける。年数の経過とともに、震災を直接体験した世代から、体験者から話を聞いた世代、さらに次の世代へと移行し、その過程で震災の記憶継承が薄れていく傾向が見られる。そのため、丹後震災記念展の内容や開催方法についても転換期が来ていると感じている。

§4. 峰山町の復興建築

松井氏の講演にあったように、北但馬地震の被害が

大きかった兵庫県豊岡市には、震災復興の町並みとして城崎温泉街や、RC 建築が特徴的な豊岡市街地が残る。これに対して丹後震災後の復興建築は、RC 建築の導入が限定的である。京丹後市峰山町には、わずかではあるが、RC 建築を含む震災復興建築が残存する。木造建築の調査が限定的であるため、RC 建築を中心に紹介したい。

まず震災翌年の1928年10月竣工の峰山商工会館(旧峰山税務署)がある。もう一つは、丹後震災記念館と同じ京都府技手の一井九平設計、山虎組の施工による峰山小学校本館がある。記念館よりわずかに早い1929年11月竣工である。丹後震災の復興小学校には、RC 建築が導入された事例が数例あったが、その中で唯一現存するものである。

また町内を流れる小西川には、震災翌年の1928年3月の大橋、2年後の御旅橋、樋田橋、田町口橋(橋桁のみ現存)、8年後に建築された千歳橋、朝日橋、年代不詳の早苗橋といった RC 造りの橋がある。城崎温泉の大碓川にかかる橋と比べると建築年代や意匠の統一がないなどの特徴がある。

木造の震災復興建築の調査は限定的なものであり、建物がまだ残っている可能性はある。震災の記憶継承のためにも、今後の調査・研究とともに、保存や啓発が望まれる。

文 献

- 山本文顕,1940,太鼓浜,琴引浜奏春譜,郷土と美術,2-5,16-19.
- 京丹後市教育委員会,2009,丹後震災記念館の建築とその後の展開,1-12.
- 京丹後市史編さん委員会(編),2013,京丹後市の災害,1-278.
- 京丹後市史編さん委員会(編),2015,図説京丹後市の自然環境,1-186.